

# 山崎闇斎『文会筆録』に見る明代朱子学 —胡居仁を中心として—

細谷 恵志

了徳寺大学・教養部

## 要旨

山崎闇斎（1619-1682）は朱子（1130-1200）の哲学の中核と云ってよい理というものを意識している。当然理は森羅万象、人事に至るまですべてに一貫して備わるものであるが、闇斎が『文会筆録』中に引いたものは『近思録』、『小学』、『大学』であり、朱子の学問を忠実に学び取ろうとした跡が窺える。闇斎の生きた江戸前期と明代初期とがある意味で共通性を持っていたのではないだろうか。胡居仁（1431-1484）の真に学問を追究する姿勢は、闇斎の学問の視点を重なり合うものがあった。名利のための学問、あるいは学問のための学問、つまり文献学的な空疎なものでなく、内面を涵養するための学問的手法を朱子学の中から導きだしたといえる。

この初期明学によって、人心を強く意識するようになったのではないかと推論する。すなわち人たるの本性を知り、人たるの本務を実践することを求めた闇斎学の一端を胡居仁から受けていることの証でもある。

キーワード：『文会筆録』、山崎闇斎、胡居仁

## Influences of the Teachings of Ming Dynasty Philosopher Zhu Xi (朱子) in Bunkai Hitsuroku (『文会筆録』) by Yamazaki Ansai (山崎闇斎) : Analysis Focusing on Hu Juren (胡居仁)

Keishi Hosoya

Department of Liberal Arts, Ryotokuji University

## Abstract

Yamazaki Ansai(1619-1682) was conscious of the *li* which can be considered to be a core concept in the philosophies of Zhu Xi (1130-1200). Although *li* applies to all things in nature including mankind, *Bunkai Hitsuroku* the hypothesis that Yamazaki worked in order to be faithful to the teachings of Zhu Xiby citing the works of *Jinsi Lu*, *Xiao Xue* and *Da Xue*. It can be suggested that there were some commonalities between the early Ming Dynasty and the early Edo Period (1603-1868), when Yamazaki was alive. Yamazaki's view of studying mirrored the attitudes of Hu Juren (1431-1484) trying to be truly committed to study. These two scholars eschewed both studying for the sake of fame and fortune and studying for its own sake— which they considered philologically void —, but studied in order to develop their inner selves. I contend that both of them have derived their academic techniques from the teachings of Zhu Xi.

It can be surmised that the teachings of the early Ming dynasty aroused a strong awareness of human nature in these scholars. Yamazaki sought to learn man's true character and carry out man's duties, and *Bunkai Hitsuroku* is evidence that he received insight into these matters from Hu Juren.

Keywords : *Bunkai Hitsuroku*, Yamazaki Ansai, Hu Juren

# 山崎闇齋『文会筆録』に見る明代朱子学

## ―胡居仁を中心として―

細谷 惠志

はじめに

闇齋の学問には明代初期の学問が少なからず影響している。闇齋の筆録である『文会筆録』<sup>(1)</sup>を読んでいくと朱子学に関係する文献がさまざまに頻出してくるが、明代初期の理学の大家として称せられる胡居仁に着目した。彼が白鹿洞書院の講師となったことは、彼自身の人生にとって大きな誇りとなったが、「続白鹿洞学規」<sup>(2)</sup>として示した内容は後学に本来の学問のあり方を提言するものである。こうした指針は、闇齋にも共感を得るものとなった。ここでは『文会筆録』に引用された『居業録』<sup>(3)</sup>の中から、どのように闇齋がそれを理解したのかを中心に考察していくこととする。尚、漢文は書き下し文に改めた。

### 一、胡居仁の学風について

胡居仁（一四三四―一四八四）は現在の江西省、余干県の人である。明の宣徳九年（一四三四）に生まれ、成化二十年（一四八四）二月十二日に亡くなった。五十一歳であった。名は居仁、字は叔心と称し、敬齋と号した。処士として門弟に教授して生涯を終えた胡南俊（号は環溪）の次男である。彼は幼い頃から聡明で、神童と称された。十二、三歳の頃より二十年ほど父に従い安仁県の大原に移り住んだが、その後、梅溪の西南の山中にある福壽墩の数畝の地に定住した。多くの書を読み、『左伝』、『公羊』、諸子百家、『楚辞』、唐詩など広く学んだ人である。山中に籠もり読書したことから敬齋と号したという。三十四、五歳頃と四十七歳の二回、白鹿洞

に教鞭を執った時期、その他各地を旅行した時期以外は家居して講学をし、五十一年の生涯を送った<sup>(4)</sup>。

胡居仁は読書人の子弟の常として七歳頃から塾師に就き経学は当然のこと学んだが、とくに程朱の理学を学んだ。胡居仁は忠信を先とし、放心を求めることを要とした。十九歳で安仁県に住む呉康齋（一三九一―一四六九）の師の于準（生卒不明）から『春秋』を学び、二十一歳の時には『小学』を読み感ずるところがあり、臨川の呉康齋を訪ね、「古聖賢の学は存心窮理を以て要となし、窮行実践を以て本となす」<sup>(5)</sup>ことを知り、科挙に意を絶った。呉康齋に対しては、「方今、海内の士、学は明かに徳は尊く、師表となすに足る者は康齋先生一人のみ」（麗澤堂学約序）と敬慕を寄せている。康齋は于準の師であり、その所謂崇仁の学は薛瑄（一三八九―一四六四）の河東の学と並んで程朱学の両大学閥であった。胡敬齋は深く心を程朱の学に潜め、その後独学すること数年、郷里の礼吾にて学舎を開いて学を講じた。礼吾書院という。そこで人事には干せず、学生を教授し、伝道を以て己が任とした。『文集』に「且つ、書院の蹟をして後世に留めしむれば、則ち千載の下、必ず観感して興起する者有り、又た豈一時の盛に止まるのみや」<sup>(6)</sup>とあり、自らの志を高尚にしていることがわかる。成化元年（一四六五）江西の提学僉事である李齡が白鹿洞書院を修復した。白鹿洞書院は、江西省廬山の麓にあった書院である。九世紀初め、唐の李渤（七七三―八三二）が創建したが、一時荒廃してしまった。朱熹が南康軍の太守として赴任したときに修復し、学を講じて、諸子に教育をほどこしたところである。北宋初めにおいても四大書院の一つに数えられるほど、重要視される学問所であったが、朱子の学問をするものは、ここは聖地のような場所といっても過言ではない。胡居仁は成化四年（一四六八）、李齡の招きによってこの白鹿洞書院において二回講学した。しかしその三年後、病に倒れ八年間の闘病生活を送る。そして再び成化十五年（一四七九）白鹿洞書院の主持を務めた。この時四十七歳であった。成化甲辰三月十二日

卒した。年五十一歳であった。居仁には、語録である『居業録』四巻がある(1)。

愚謂へらく聖人の教を設くる、人固有の理に因つてこれを品節し、これによりて学ばしむるにあらざるなし。すなはち徳明らかならざるなく、身修まらざるなし。今の学者、気高き者あらば、すなはち空無玄妙の域に馳騫し、明敏なる者は、おおむね該博を以て尚しとなし、科名を心となし、またその下し者は、詩句浮詞に終りて以て世に媚び容を取るに過ぎざるのみ。いまだ嘗て聖賢の学あるを知らざるなり。それ聖賢の学、これを己に得れば、以て善治を成し、風俗を美しくし、教化を興すべく、三代復すべきなり。或者は以為へらく。聖人の道は高遠にして至り難く、後学のあえて及ぶ所にあらずと。殊に知らず、有生の類、その性本同じく、ただ聖人は物欲の昏くする所とならざるのみなるを。今、学者誠に能く存養省察し、本心をして常に明らかに、物欲をして行なはれざらしむらば、すなはち天性おのづから全く、聖人学んで至るべきなり。聖人あにその易き者を隠し、反つて艱難阻絶の域によらしめんや。また道学はもとより美しきも、世俗の尚ぶ所あらずして利行せざるのみと以為ふあり。殊に知らず、日用の間、この道の流行にあらざるなきを。近くしては灑掃應對、親に事へ物に接するの間より、推して民に仁し物を愛するに至るまで、用ふる所として周ねからざるなく、施す所として利しからざるなし。ただ教養方なきによりて、人みづから察せざるのみ。居仁、愚陋を揆らず、竊かにこれに志すあり。ここにおいてあえてみづから私せず、有志の士と講明してこれを踐行せんと将欲す。(続白鹿洞学規(8))

聖人が教えを設けたというのは、人には理があつてその理に従えばそれぞれ身分や立場によつてやるべきことがある。聖人の説く理に基づいたならば徳が明らかとなり、身も修めることができる。ところが今の学者や、ちよつと気取つた者は、仏老の世界に行き、さとい者は広く知識があることをいいこととして、科挙ために心を奪われ、それより低い者は、軽薄な

詩を作つて世の中に媚びるだけである。そうした者は聖賢の学がなぜ世の中にあるかという意義がわからないでいる。もし聖賢の学を体得したならば、よく治まり、風俗が美しくなり、教化が自然と行われる。ところが人は聖賢の道は果てしなくて、学んでもそこまで達することがないとあきらめてしまつてゐる。生あるものはみな等しく性があり、ただ聖人といわれる人は物欲がないというのを知らないのである。今、学問をする人は、存養省察し、本心をしていつも明らかにして、物欲によつて行動しなければ、天性は本来の完全な天性となり、聖人が学んで至る境地にたどり着くのである。それなのにどうして聖人は安易なものを隠して艱難の域に行かないのか。また道学は美しいものであるけれども、世俗がたつとばないので行われなかつたと思う。日用にこの道が流行したのを知らない。昨今では日常の事、親につかえること、物事の対応まで。民に仁をほどこすことから、物を愛するにいたるまで、これを用いることは広く、施してはいいことばかりである。ただ教育の仕方が分からないので、人は自分からは分からないだけである。志ある人々とこれを実践したい。というのがこのおおよその意味である。ここから読み取れることは、この聖人の教えを学問のための学問としておらず、人の内面を涵養するものとしてこれを学ぶことをすすめるものであるということである。科挙のため、名利のために学問を利用するのではなく、日常においてこの学問が実践されれば、世の中がよく治まるということが述べられている。なぜ胡居仁が道学を提唱し、後学に教え、世に広めようとしたのか。彼の生きていた明初において、「気高き者あらば、すなはち空無玄妙の域に馳騫し、明敏なる者は、おおむね該博を以て尚しとなし、科名を心となし、またその下し者は、詩句浮詞に終りて以て世に媚び容を取るに過ぎざるのみ。」という情況であつたこと、これを何とかせねばならないと考え、この教えはすべての日常生活の基であるということをお説き、聖人の教えが有益であることを説くものである。

## 二、胡居仁の「心」について

胡居仁は敬と誠の二つを提唱して、「誠敬を主として以て其の心を存す。」の一条を「続白鹿洞学規」に加えている。そしてこの後に次のようにある。

愚聞く、人の一心万理ことごとく備はると。蓋しその虚霊の体はこれを天より得、吾の一身を主りて、天下の事を宰制する所以の者なり。孰れかこれより大なる者あらんや、孰れかこれより貴き者あらんや。然れども放ちて存せずんば、日に以て昏昧、至大至貴の物反つて卑汚苟賤の域にして自ら知らざるなり。しかして放つ所以は、物欲牽引し、旧習纏繞するによりての故に、雑慮紛紜し、休息する能はずして、時として腔子の内に在るなきなり、ただよく誠敬を主とすれば、則ち本心の全体これに即して存し、外邪客慮よつて入るなきなり。蓋し眞実無妄をこれ誠と謂ひ、主一無適をこれ敬と謂ふ。二者既に立たば、すなはち天理いづくんぞ明らかならざるあらん、人欲何に従ひて生ぜんや。ただその功夫効驗、周遍精切にして一言のよく形容する所にあらず。ここを以て聖賢の誠敬の道を言ふ所を類集し、共に一篇となす。以て体験して得るあるべきに庶からん。愚おもへらく今の学者、ただ己の心を尽して一毫の虚妄あらしむるなく、齋莊嚴肅にして一毫の惰弛あらしむるなかるべし。すなはち所謂眞実無妄、主一無適なる者、おのづから至るべし。これによりて理を窮め身を修めこれによりて以て家を齋へ国を治むれば、また何の可ならざる所ならん、何のよくせざる所ならんや。程子の所謂聰明睿智これより出づとは、信に我を欺かず。「続白鹿洞学規」

胡居仁の重んじた敬は誠の心によつて至るのであり<sup>⑨</sup>、敬と誠とは表裏一体の関係にあるといえる。初めに述べられたように心をすべての拠りどころとしているという前提で論じられている点に着目しなければなるまい。この心が人をも善にもするということである。誠敬を主とすれば心が自然とその誠敬にしたがつて邪な考えなど入る余地もなく、この誠と敬とが

確立されたならば、天理が明らかとなるので人欲などおこらないですむ。こうした理を突き詰めて身を修めることができたなら、治国齋家となるのである。程子の言を引き「聰明睿智皆これより出づ」とはわが心を欺かない、すなわち天理にしたがつた本来の心の状態、「虚霊」であるということである。さて、この胡居仁の言う心については『居業録』に詳しい。

内と外とを離し、心と迹とを判つは、これ二本なり。蓋し心は衆理を具へ、衆理は悉く心に具はる。心と理と一なり。故に天下事物の理、外に在りと雖も、これを統べて吾が一心に在り。……故に聖人、一心の理を以て天下の事に応じ、内外一致し、心迹二なし。異端の虚無空寂は、この理先に内に絶す。何者を以て天下の事に応ぜんや。その専ら内を事としてその外を遺し、これを迹に考へずして、専らこれを心に求むるにより、事物の理を厭棄して専ら本心の虚霊を欲す。これ内外、心迹を分つて二本となせり。愚、嘗てこれを思ふに、内外心跡終に他を二にするを得ず。『居業録』卷一

ここでいう内はすなわち心、外はすなわち跡である。心はあらゆる理を具えているので心と理とは本来一つである。その心によつて跡が発現するのであるから、この心と迹とは本来一つである。跡は事象とでも言おうか。「異端の虚無空寂」すなわち仏教は、内を事として考えて外である迹を考えないために、心の面ばかり突き詰めているという。胡居仁がこのように批判するのは事象を考えずにいる点である。心が事象の大本であり、事象はとりもなおさず心であり、心と事象とは連鎖、あるいは融合していると考えなければならぬのだ。この学問の目的あるいは意義とは、人の心を天理を具えられる本心に向う学問としなければならないということである。だから内と外、心と迹とは一つであつて、それぞれが独立しているものではないというのである。この内外は中庸に「内外を合するの道」とあるものである。程子が「豈に迹、非にして、心、是なるものあらんや」（遺書卷一）と仏教を批判している。こうした考えを胡居仁は肯定しているのである。

人心に万理咸く備はる。あらゆる所なし。只だ修省し得て到るを要するのみ。『居業録』巻二

ここでも心に理が備わるといっており、換言すれば理が心の働きを制御する司令塔のようなもので、心より下の存在ではない。「心と理と一なり」とあるように、一つとは言ってもイコールではない。理は天理ともいえるだろうが、当然の法則である天の理が人の心に備わることによって作用する心の働きを期待するものである。心の中に理が存在するといっても、そうしたそれぞれの次元を理解しなくてはならないのである。心即理という朱子学の考え方である。そこが後に流行する王学との違いである。

小学・近思録・四書上に在りて、工夫を做し得ること真なれば、異端功利もともに害ふを得ず。『居業録』巻一

『小学』・『近思録』・四書を学ぶべきで、異端を斥けることが述べられている。『小学』は朱子学の基礎基本であるから、ここを出発点として、経書を読むという意図であろう。

心に主宰なければ、静にもこれ工夫あらず、動にもこれ工夫あらず。静にして主なければこれ天性を空了にするのみならず、便ち天性を昏了す。これ大本の立たざる所以なり。動にして主なければ、もし猖狂妄動せざれば便ちこれ物を逐ひ私に徇ふ。これ達道の行はれざる所以なり。

已に立ちて後、自ら能く万事を了当し得るはこれ主あるなり。『居業録』巻一

心には主宰がある。この主宰がなければ、静においても動においても天性が空虚であって何の効力も発し得ない。とくに動のときには心に主宰がなければ無軌道になってしまう。「心精明なるは、これ敬の効、才に主一なればすなはち精明なり一三一条」というように主が一つでなくては心の精明はたもてないのである。これも程子の説を継承したものである。「敬はこれ莊嚴畏謹の意。程子主一を説くはこれ直截に心地上に在りて工夫を做さしむ。一六五条」と程子の主一を解釈している。また「一とは誠なり。主

一とは敬なり。敬により誠に入る。一四三条」という。

儒者は敬以て心を存す。その心体湛然として腔子裏に在り。主人公の家に在つて便ち能く家事を整治するがごとし。これ箇の活主人なり。積氏は黙坐澄心し、思慮を屏去し、久しくして空豁に至る。これ主人なきなり。また只だこれその心を繫制し、これを存せしむる者あり。便ち死殺し了り他主と做るを得ざるなり。人家只だ駭底の主人を得て、全く家事を整理する会はざるがごとし。蓋しその心を繫制して、蠢然として一物のごとくなるに縁る。これすなはち禅の下なるものなり。真空無心はこれ禅の上なるものなり。『居業録』巻一

儒者は敬こそ心になければならない。仏教では静かに座して心を空にするので、まったく家に主人がないのと同じである。主人がいなくては家事が行われないという。敬をそなえた心は、胴体に満たされているものだと考えている。

程子曰く、「涵養は須く敬を用ふべし。進学はすなはち知を致すに在り」と。聖学の功を用ふるの要、これより切なるは莫し。『居業録』巻二

敬は便ちこれ操。敬の外に箇の操存の工夫あるにあらず。格物は便ちこれ致知。格物の外に箇の致知の工夫あるにあらず。『居業録』巻一

修養するにおいては敬を行うことという程子の説を引いている。あるいは「知を致すは物に格るに在り」という朱子の考えを継承するものである。

道理の追究こそが、朱子学の真髄である。胡居仁は程子の言を『居業録』に度々引用しているが、これは朱子の窮理の思想をまったく継承しようという姿勢である。是非の言葉でいえば、朱子学、儒学は是、老莊、釈氏は非であると論じている。所謂、修身によって家が斎い、天下国家が治まるという現象がえられるように、心のありようを研究するものであり、目的がはっきりしていることが、処々に論難した老莊、釈氏とはことなることが、『居業録』から感得できるのである。

つまり、胡居仁の著述を考察するに、学問の道統ということを実に意識

していることが分かる。なぜ度々程子曰くというのか、また朱子の思想を著しているのかを考える必要がある。時の数多くの学者よって正しい朱子学が行われてなかったということ、または科挙という制度によってこの及第を目的として、本来行われるべきところの「涵養」が疎かになっていったということが明らかである。朱子学を改良したり、発展させたというよりも、朱子の学問の意味を本当に理解し、それを今の人に正しく理解し、それを実行してもらおうかという目的であった。朱子の唱える聖学の純然たる姿に帰すことに尽力した。朱子を踏襲し、継承した学問である<sup>(10)</sup>。これが朱子の教えを絶やさないとすることに繋がる。第一章にも見たように、時代に即した教えの工夫がなされた。胡居仁の学問の方法が実践的といわれる所以は、彼のこうした意図によるところが大きいのではないかと推察する。

### 三、山崎闇斎『文会筆録』にみる胡居仁の思想について

闇斎の学問は朱子学より始まったが、朱子学の文献を讀書し摘録しながら、独自の学問を樹立した。『文会筆録』には朱子学、あるいは程朱の学が多く記録され、さらに闇斎の見解が示されている。

以下『文会筆録』に引用されている胡居仁の言、またその関連するものを挙げ、一考を加えていくこととする。

敬斎曰く、朱子、四書詩伝を註せり。先づ文義を訓釈して然る後にその正意を發明し、又、旁に議論を引きて以て言内の意を足し、或は言外の意を發明せり。此れ深く経を積するの意を得。(『文会筆録』九)

ここからは胡居仁が朱子の学問の方法をどのように解していたかが分かる。四書や『詩』の注釈をして、まずその文の意味を理解して、それから後にその正しい意味を明らかにしながら、さまざまな論を取り入れ、文章の間を読んでいった。このようにして深く経を解釈する意義を得たということだが、闇斎もこの方法を大いに取り入れ、朱子学の文献を読みつつ最終的にはそれぞれの文意を解読していった。ここにはどのような順序で経

学の書物を読み解くべきかという指針を得たのである。

胡敬斎が曰く、学者の邪路を断截するには、異端に入らざらしむを要せば、須らく之を小学の上より做（おぼ）を教ふれば則ち基本堅実にして、自ら空虚の患無し。<sup>録業</sup>(『文会筆録』一之二)

また曰く、異端を闢くことを要せば、当に先づ人をして小学を学ぶを教ふべし。<sup>三同</sup>(『文会筆録』一之二)

また曰く、礼義は人心の固有、朱子去れること遠くして小学、家礼、これを好む者、甚だ衆（おほ）し。今、陳公甫が輩、務めて高遠に為し、礼節の卑近煩細を厭て、これを為すことを屑（こぼ）とせず。勝て嘆ず可きかな。<sup>四同</sup>(『文会筆録』一之二)

朱子と同様、異端を排するということを胡居仁も示していることを取っている。そして『小学』という語が度々出てくるが、『小学』を重んじていることは胡居仁と同じである。『小学』は朱子学における基礎であり、内篇・外篇の二篇から成り、それぞれ立教・明倫・敬身・稽古と嘉言・善行からなる。闇斎の最も重んじる「敬」の思想はここに記されている。礼義は人心固有のものであるから、これらを充分に行うことも朱子学では重んじられている。それぞれを立場に応じて、礼が決っており、そのルールに従えば混乱が起らないものである。煩雑な礼節を斥けることはまことに歎くことである。

居業録四に曰く、敬以て内を直にすれば、是れ仁義礼智の内に在るを養ひ得て、偏ならず、倚ならず、故に曰く中と、曰く大本と。義以て外、方にすれば、是れ惻隱、羞惡、辞讓、是非の情に達し得て、各々其の宜きを得、故に曰く和と、曰く達道と。内を直にすれば、是れ内裏正当にして非僻の自りて入ること無し。外を方にすれば、是れ外面処置し得て当り条理分明にして各々体面有り。各々準則有りて移し易きこと得ず(『文会筆録』七之三)

「敬以て内を直にす」は闇斎のよく言うところである。内すなわち心を修

養するのに敬なれば、心にある仁義礼智を養うことができる。偏らず、中となり、しかも大本となる。内に対して外を方にすれば義が立つものである。心を大本として表れる行為と説明したらよいだろうか。「惻隱、羞惡、辭讓、是非の情」に到達し自然に和し、道を行うことができる。だから内を直にすることによって邪なものが入る余地がなくなり、義理や道理がおのずとあきらかになるという考え方を引いている。

居業録二に曰く、易は是れ君子にして時に中するの道。（『文会筆録』十一之一）

居業録二に曰く、易とは変易なり。時に随ひ変易して以て道に随ふなりと。是れ易を作する者と易を用ひる者とを指さして言えは、すなはち人に渉るなり、若し理を論ぜばすなはち易は即、道の為す所にして道に従ふに非らざるなり。（『文会筆録』十一之一）

『易』は五經の第一に掲げられるほどの儒学にとつては重要な書物であり、あるいは古代漢民族の思想的表象といつてもよいだろう。朱子も『周易本義』を表している。変易、不易、簡易の意味を易は含んでいるというのが基本的な考え方である。易は八卦等によって天地万物の象を表し、時に占した象によって天下の吉凶を占った。古代においては政治に用いられた天命思想と深く関わっている。この象の方法だけが一人歩きしてしまつては、単なる占術として尽きてしまふが、出た象によって内省することによつて哲学的意義が生れてくるのである。そこで右のような言を引用することとなるのである。程朱の理氣論の根本にはこの易の正しい解釈なしになしえないのである。理や氣を論ずること、人間の心を正しくし、あるべき本来の姿に立ち返らせようとする。内を正しくすれば、必ず外も正しくなる。心即理、理氣一元論の考えが、朱子学の伝統的なものである。

居業録二に曰く、黄勉齋の言、性、氣質の為に雜ふ所と雖も、然どもそのいまだ發せざるや、この心湛然として物欲生ぜず。氣は偏なりと雖も理自ら正しと。以て子思の未發の中を積するに又朱子、未發の前は氣、

事用ひざるを引きて證と為す。竊に恐る誤りなり。それに偏濁の人は未發の前、已にその中を失す。故に已發、和することあたわず、故に子思、人に中和を致すことを教ふれば、先儒、存養を以て中を致すと為し、省察を和を致すと為す。不善の人もまた静なる時有り。然れどもその時、物欲固にいまだ動かす。然ども氣已に昏く心已に偏倚し理已に塞りて本体已に虧く。故に未發以前の工夫を做さばすべからく敬を主とすべし。

子思の言、戒謹恐懼、程子の言、莊整肅肅、朱子の言、端莊靜一。（『文会筆録』六）

黄勉齋（一一五二—一二二一）は黄榦のことである。幼くして、朱子に教えを受けた人であり、最も朱子の信賴厚い学者である。黄勉齋の言葉は、性が氣質のために混ざっているといつても。その性が發せられないときにおいては、その心が湛然として物欲は生じない。氣は偏っていたとしても理は自然に正しいと。そして子思の未發の中を解釈するのに、朱子は未發の前は氣が、事を使わないということ根拠とした。偏り濁っている人は未發の前はすでにその中をなくしているから發したり和したりすることができない。だから子思は人に中和をすることを教えれば、先儒は涵養すること、中を致すことをし、省察することを和を致すとした。不善の人であっても静であるときがある。そうしたときは物欲は發生しない。けれども氣が昏く心が偏つていれば理が塞がついていてのために本体が欠けてしまつてゐる。だから未發已然の工夫をするならば、かならず敬を主としなければならぬ。闇齋の思想の中心は主敬思想であるが、ここで闇齋が敬を重んじたことがよく理解できるのである。理氣一元論あるいは理氣二元論など朱子の学も中においてもその解釈はさまざまである。しかし、その大本を考え、さらに存養という面を鑑みれば、おのずと敬の大切さに氣が付いたのである。本然の氣、理が純であるためには云々と皆さまざまに朱子の学あるいは聖賢の学を追究してきたが、善となる、不善となるという以前に敬を重んじるることによつて、必ずひとは正しい理となり、したがつ

て心も善となれば、必ずその行いも善となるといふ考えに到ったことが推察できるのである。『居業録』には物欲を厭うことが表れているが、闇斎もこれを引いている。当然この物欲が起らないためにどのようなようにしたらよいのかを考えめぐらした結果が敬に行き着いたともいえるが、物欲、名利によって本當の学問の目的が達成されないことへの危惧が、こうした思想へと帰着したのである。

おわりに

程伊川の「既に是れ塗轍なれば却てただこれ一箇の塗轍のみ」を『文会筆録』に引いている。塗轍は道筋の意味である。ここでも分かるように理というものを意識している。これは朱子の哲学の中核といってよい。当然理は森羅万象、人事に至るまですべてに一貫して備わるものであるが、闇斎が『文会筆録』中に引いたものは『近思録』、『小学』、『大学』であり、朱子の学問を忠実に学び取ろうとした跡が窺える。そして闇斎は明代初期の理学家の言を引用している。闇斎の生きた江戸前期と明代初期とがある意味で共通性を持っていたのではないだろうか。胡居仁の真に学問を追究する姿勢は、闇斎の学問の視点を重なり合うものがあった。名利のための学問、あるいは学問のための学問、つまり文献学的な空疎なものでなく、内面を涵養するための学問的手法を朱子学の中から導き出したといえる。さらに、これは空理空論と見られがちな太極、無極、理氣といった哲学を常に人の行いに結びつけ、それが有益であることを確信していた。「既に是れ塗轍なれば……」の一連のくだりに「これ居業録、一に人心を以て之を説く」と闇斎は注をしている。胡居仁の学問が人心を説くものとして認識し、これを深く理解している。この初期明学の一つによって、人心を強く意識するようになったのではないかと推論する。すなわち人たるの本性を知り、人たるの本務を実践することを求めた闇斎学の一端を胡居仁から受けていることの証でもある。

注

- (1) 『文会筆録』日本古典学会、山崎闇斎全集を参照。
- (2) 正誼堂全書『胡敬齋集』巻一を参照。
- (3) 『居業録』書名は『易』、乾卦九三の文言伝の「脩辭立其誠、所以居業」に由来している。胡居仁の女婿であった余祐により、弘治甲子（十七）に編録刊行され、万暦年間にも重刻されて、四巻本であった。和刻本は原刻本の系統を引く版本の翻刻と思われ、重校者に万暦の進士で天啓三年に没した高安の陳邦瞻の名があることから、おそらく万暦の刊本に依拠したものと思われる。ここでは家蔵の和刻本に拠った。
- (4) 『明儒学案』巻二、崇仁学案二、文敬胡敬齋先生居仁、参照。
- (5) 『胡敬齋文集』巻一「奉于先生 答進邑大尹」、巻二「棠溪書院記」。参照。
- (6) 『敬齋文集』巻一、上邑宰、参照。
- (7) 本稿は万暦本の覆刻である和刻本を用い、『文会筆録』に引かれたものを適宜参照。
- (8) 『胡文敬集』巻一「続白鹿洞学規」参照。
- (9) 吉田公平氏は「人心は万理咸な備わりて有らざる所無し。只だ修省得道を要す（『居業録』巻二）」『集刊東洋学』第二十一号「胡敬齋の思想」などを引いて、心を明德の意味に規定していると解釈している。
- (10) 馮会明氏は理氣心性などの哲学の面からみると、胡居仁は「沿襲了二程朱熹的学説、没有太多深刻的理解、精切的發揮、也没有太多理論上的突破。」（『胡居仁与干之学研究』第四章）と述べているが、それは二程子および朱子の学問を純化した形で踏襲しようとしたと考えられる。

査読終了年月日 平成二十六年十二月十一日